

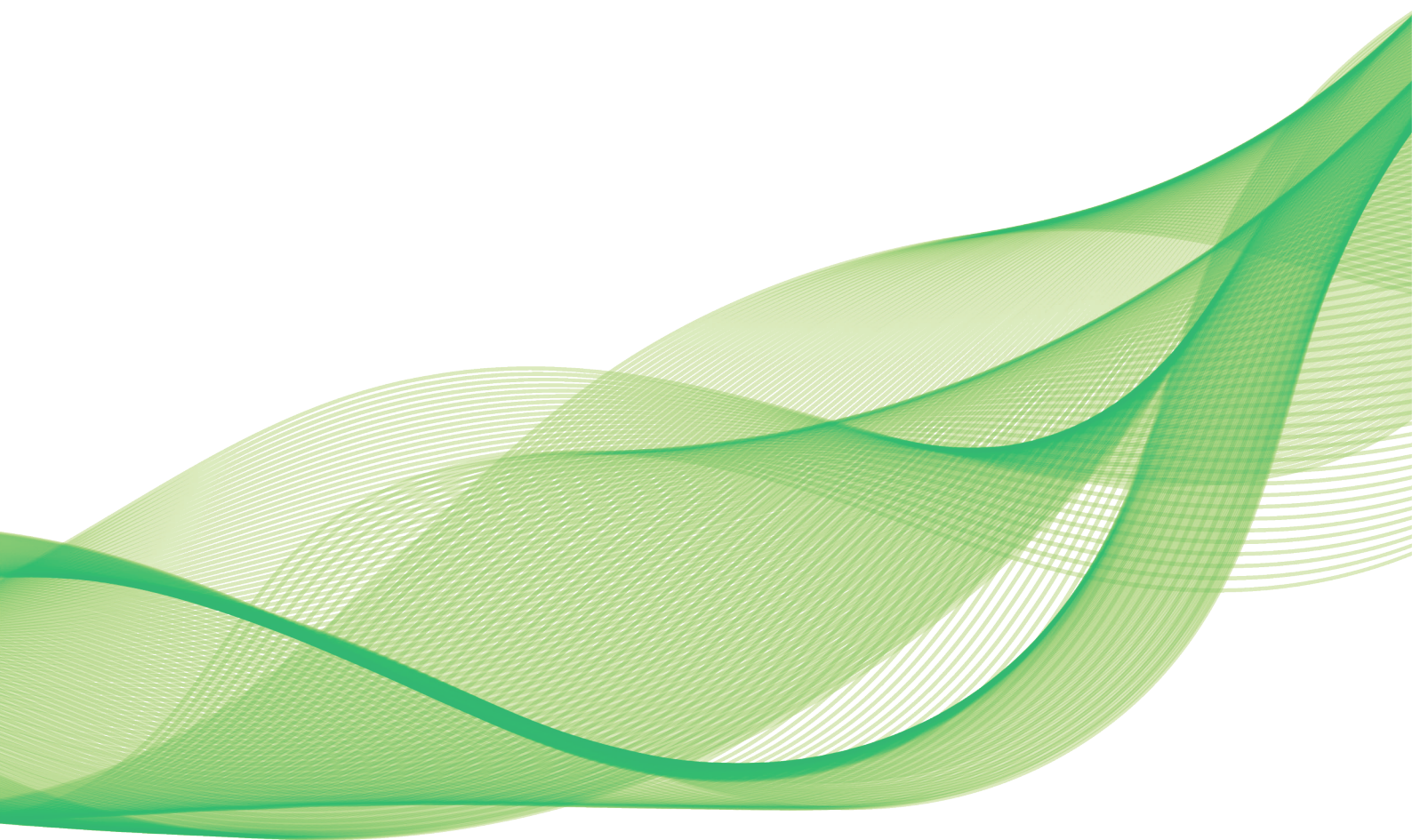
令和元年度

地域経済産業活性化対策費補助金

(被災 12 市町村における地域のつながり支援事業)

---

# 取組事例集



# はじめに

---

本事業は、福島相双復興官民合同チームの個別訪問活動を経て集められた被災地域の声や要望を基に、経済産業省で平成28年度に設けられた事業です。東京電力福島第一原子力発電所の事故に伴い避難指示等の対象となった福島県田村市、南相馬市、川俣町、広野町、楡葉町、富岡町、川内村、大熊町、双葉町、浪江町、葛尾村及び飯舘村における被災者の人々とのつながり創出を通じ、地域の活性化、さらには産業復興や、まちづくりにも資するような取組を支援することを目的とし、令和元年度「地域経済産業活性化対策費補助金（被災12市町村における地域のつながり支援事業）」を実施しています。

今回、取組の事例集をまとめるにあたり、これらの取組が広く伝わって地域の再生に繋がる一助となり、さらにこれらの取組を参考に今後の被災地域のつながり創出やコミュニティ再生に取り組まれる皆様の活動の一翼を担えることができれば幸いに存じます。

最後に、本事例集の作成にあたり、取材や資料の提供等にご協力をいただいた各取組団体の皆様はじめ関係者の皆様方に、心から感謝申し上げます。

2020年 3 月

株式会社ジェイアール東日本企画

令和元年度 地域経済産業活性化対策費補助金  
（被災12市町村における地域のつながり支援事業）事務局

# 目次

## 被災 12 市町村における地域のつながり支援事業 事例紹介

|    |                                                                                                  |    |
|----|--------------------------------------------------------------------------------------------------|----|
| 01 | 子供たちの定住と郷土愛を育むプロジェクト<br>(対象者:田村市 / 実施地:田村市)                                                      | 2  |
| 02 | 塚原海岸にアートで希望と笑顔の広場をつくる取組<br>(対象者:南相馬市 / 実施地:南相馬市)                                                 | 3  |
| 03 | 相双文化発信センター遊枝交流会<br>(対象者:広野町 / 実施地:広野町)                                                           | 4  |
| 04 | スポーツを通じた地域コミュニティ再生事業<br>(対象者:楡葉町 / 実施地:楡葉町)                                                      | 5  |
| 05 | 防災を学ぶイベント<br>(対象者:富岡町 / 実施地:富岡町)                                                                 | 6  |
| 06 | 川内村の幸福感を持てる村づくりを促進する取組み<br>(対象者:川内村 / 実施地:川内村)                                                   | 7  |
| 07 | そば教室による交流促進を計りながら、コミュニティの再生を計る取り組み<br>(対象者:浪江町 / 実施地:浪江町)                                        | 8  |
| 08 | いいたてお母さんコーラス40周年記念クリスマスコンサート<br>(対象者:飯舘村 / 実施地:飯舘村)                                              | 9  |
| 09 | 山中郷ウォークラリー<br>(対象者:飯舘村 / 実施地:飯舘村)                                                                | 10 |
| 10 | 菜園づくりを楽しむ会<br>(対象者:浪江町 / 実施地:いわき市)                                                               | 11 |
| 11 | 手編み教室の開催<br>(対象者:大熊町 / 実施地:東京都)                                                                  | 12 |
| 12 | 有志の方々が撮影し保管していた浪江町の震災前の伝統行事の写真を集め、写真展を開催。交流を図りながら、地域の伝統を継承する取組。<br>(対象者:浪江町 / 実施地:浪江町・いわき市・二本松市) | 13 |
| 13 | 編物・パッチワーク・フラワーアレンジメント教室<br>(対象者:大熊町・双葉町・浪江町 / 実施地:いわき市・茨城県)                                      | 14 |

取組  
団体

## 田村市都路町第7行政区

代表者 今泉 清司さん

取組  
名称

## 子供たちの定住と郷土愛を育むプロジェクト

## 取組の概要

震災前の都路町の人口は3,000人でしたが、令和元年現在では2,500人に減少しており、少子・高齢化が進んでいます。取組では都路町の中心部にある第7行政区に、これからの地域を担う若者や子供たちの定住促進と郷土愛を育むためにイルミネーションを設置しました。共同作業を通して多世代が交流し、共に地域を守っていく意識が芽生え、絆も深まりました。また、都路町の活性化にもつながりました。

## ■取組の様子

イルミネーションは都路町の中心部にある中学校の斜面に設置しました。地域住民が協力し合い、設置前の杭打ちやネット張りなどの共同作業を行い、コミュニケーションを取る中で地域を共に守っていく意識が芽生え、参加者間の絆が強まりました。毎年、来町してくれている桜美林大学の学生には、町外から見て都路町をどのようにしていったらよいか意見を出してもらい、また、イルミネーションの設置に関しても積極的に取り入れています。参加者間の世代を越えた多様な交流が生まれ、準備は和気あいあいとした雰囲気の中で進みました。

点灯式は、子供たちを中心に司会・進行をしてもらいました。やや緊張した子供たちが一生懸命に会を進めていく姿は大変に微笑ましいものでした。また、点灯式の終了後には60代～70代が中心となっている愛都路の会や桜美林大学生・神奈川県来恩寺<sup>めとろらいおんじ</sup>といった県内外の方々との交流も深めることができました。

## ■実施者の声

若者と地域住民との共同作業でイルミネーションの設営を行いました。世代を越えて会話も弾み、楽しく実施することができました。この取組以降、町内3か所でもイルミネーションが設置・点灯されるようになり、冬場の町に活気が生まれました。都路町商工会では3か所のイルミネーションの写真や動画を発信するスタンプラリーを実施し、町内外の方々からも好評を得ることができました。

## ■参加者の声

「寒かったけれど、子供たちが感動していました」「ボランティアとして桜美林大学から来ましたが、地域の子供たちと交流できたことがよかったです」「孫が都路に来る楽しみが増えました」「年末年始に帰ってくる帰省者が喜んでいました」





取組  
団体

## 塚原海岸アート実行委員会

代表者 村井 俊道さん

取組  
名称

## 塚原海岸にアートで希望と笑顔の広場をつくる取組

## 取組の概要

人口が激減した南相馬で地域のつながり創出と、津波による被災後の風景の再生などの課題を解決する取組として、海岸アートを実施しました。震災前の風景が失われた海岸公園を、地域の歴史を伝え、復興への希望を発信する場として再生することを目指しました。震災後に建設された巨大防潮堤を、地域の過去・現在・未来を伝えるアートで彩りました。

## 取組の様子

お盆の帰省時期に合わせて、塚原海岸公園の防潮堤において、アートフェスを開催しました。事前に、震災後に休校している小学校の校舎を借りて、アートユニットNANNOMIYA監修のもと、防潮堤に飾る防災シートに地域の過去・現在・未来をテーマとした下絵を描きました。色塗り仕上げには、地域内外からの参加者を募り、巨大アートを完成させました。

当日は、巨大アートのお披露目やアートユニットによる絵の解説に加え、真っ白な防災シートに自由な絵を描くコーナーや、丸石にアートを描く企画を準備し、子供からお年寄りまで総勢約50名の参加者で賑わいました。その後一週間の期間限定で防潮堤にアートを展示し、アートフェスに来られなかった方にも絵を見てもらう機会をつくりました。アート見学と合わせて海岸を散歩する人々を見ることができました。また、あかりのファンタジーイルミネーションinおだかに合わせて、まちなかに新たに作られた小高交流センターにおいても巨大アートを展示し、多くの来訪者に地域の歴史や復興への希望を発信することができました。

## 実施者の声

さまざまな人が立場を越えて被災地域に想いを寄せる機会となりました。参加者全員で震災前の記憶の風景を共有し、地域の未来のことを考え、想いを巡らせることができました。巨大アートの防潮堤への常設は、多くの制約がありますが、機会を見つけて再び展示するか形を変えて継承するなどし、引き続き地域の魅力を発信していきたいです。

## 参加者の声

「お墓参りで帰省した際に、偶然通りかかって参加しました。昔の風景を思い出し、懐かしい人たちとも再会することができました」「他県からボランティアで参加しましたが、地元の皆さんが頑張っている姿を見て心を打たれました」



取組  
団体

## 相双文化発信センター遊技交流会

代表者 吉野 州一さん

取組  
名称

## 相双文化発信センター遊技交流会

## 取組の概要

帰還後に引きこもりがちになっていた地域住民の方々に対し、将棋、囲碁、オセロ、麻雀などの昔ながらの遊技で交流することで楽しみや生きがいを見出してもらいたいと思い、遊技交流会を開催しています。参加者は子供から高齢者まで幅広く、広野町、檜葉町、富岡町にお住まいの方の他、いわき市に避難された方々も集まっています。本年度からは座談会も設け、参加者同士が自由に話し合うことで、心身のストレスを解消する場ともなっています。

## ■取組の様子

昨年度から開催している遊技交流会では、月に2回、参加者の方に将棋、囲碁、オセロ、麻雀の4種類の遊技を通じた交流を行っています。本年度は毎回講師を1名招き、初心者の方でも楽しんでもらえるように工夫しました。当初は、高齢者の参加を想定していましたが、いまでは子供や若い世代の参加者もあり幅広い年代が集まる会となりました。それまで階段のある建物で実施していましたが、会場をバリアフリー対応になっている広野町公民館に変更したことで、車椅子の方にも参加していただけるようにもなりました。広野町、檜葉町、富岡町、その他遠方からの参加者も増えてきています。

また今年度からは、遊技交流会だけではなく、誰でも参加でき、気軽に発言できる座談会も開催しています。地域に関するさまざまな事柄を自由に話し、意見交換をすることによって、参加者同士もこれまで以上にお互いを理解し合い、信頼を深める機会を持つことができています。地域の方々が交流することで、生活に張りが生まれ、生きがいを見出してもらいたいという目的が、少しずつ達成されています。

## ■実施者の声

私たちの遊技交流会は、これまで月2回の開催を1年3か月続けてきています。会を楽しみにして、毎回参加して下さる方々が多くいらっしゃいます。遠路はるばる訪れて下さる方もいます。こうして皆さんにご参加頂けることに喜びを感じています。今後は広報活動にも力をいれて、さらに多くの方々にご参加頂き、楽しんでいただけるよう工夫をしながら会を継続していきます。

## ■参加者の声

「遊技交流会への参加が、日々の生活の中で、いま一番の楽しみになっています。地域のみんなさんと集まり、遊技を通して楽しめる場があることを、とてもありがたく、嬉しく思っています。ぜひ、いつまでも続けてもらいたい」



取組  
団体

## 浜通りフットサル交流プロジェクト

代表者 門馬 健治さん

取組  
名称

## スポーツを通じた地域コミュニティ再生事業

## 取組の概要

檜葉町では避難生活によって、地域住民の交流が減少していました。そこで、スポーツによる交流の機会を設け、地域のコミュニティの再生を図りました。国内有数のスポーツ施設であり、震災時には復興拠点にもなったJヴィレッジを会場とし、サッカー教室とフットサル大会を実施。地域内外の住民へ呼びかけたところ、若い世代を中心に多くの参加者が集まり、にぎやかな交流の機会を持つことができました。

## ■取組の様子

檜葉町では震災後の避難生活によって、地域住民のコミュニティが薄れつつありました。そこで、地域内外の住民に呼びかけ、スポーツを通じた交流によるコミュニティ復活を目的に、Jヴィレッジでサッカー教室とフットサル大会を開催しました。サッカー教室は対象者を5歳から小学校中学年までとし、子供同士や家族間での交流を深めることができました。当日は、Jヴィレッジのトレーナーにコーチを依頼し、参加者同士が安全で楽しい時間を過ごしました。フットサル大会は中学生から40代までの方を対象とし、若い世代のコミュニティ醸成を図りました。大会には地域内外から集まった8チームがリーグ戦とトーナメント戦の試合を実施。チーム紹介や試合の実況アナウンスを行うことで会場の熱気が高まり、より白熱した試合が行われました。

スポーツの楽しさを通して、家族との絆や、避難生活によって離ればなれになってしまった旧友や地域住民同士が交流を深める機会を創出することができました。

## ■実施者の声

子供から大人まで幅広い世代が交流できました。檜葉町で実施したことで、町のPRにもなり、参加者にとっては避難生活で失われつつある故郷への思いを深める機会にもなりました。開催時期やチーム構成などの課題はありますが、今後も継続開催を予定しています。浜通り地区の子供たちがスポーツに愛着をもち、将来は世界で活躍する選手が誕生するきっかけにもなってほしいです。

## ■参加者の声

「プロも使用する大きくて素晴らしいコートで、のびのびと体を動かすことができ、とても気持ちよかったです」「久しぶりに友達と会うことができ、とても嬉しかったです。次回もぜひ参加して、次は優勝したい」





取組  
団体

## 一般社団法人とみおかプラス

代表者 大和田 剛さん

取組  
名称

## 防災を学ぶイベント

### 取組の概要

震災以降、富岡町にどとまらず近隣町村でも公営住宅や集合住宅の整備が進み、災害に対する新たな設備が充実しつつあります。地域では新たなコミュニティも生まれています。そこで私たちは、大災害の教訓に立ち返り、防災意識を高めるイベントを開催しました。富岡町の災害公営住宅で初の避難訓練を実施し、防災士の講演、災害食の試食、防災設備のデモンストレーションも同時に行いました。

### 取組の様子

イベントは富岡町内の曲田第一団地集会所内で実施し、新旧住民や近隣の就業者の方が参加しました。デモンストレーションでは集会所にある防災設備（ベンチカマド、マンホールトイレ）の使い方を学びました。日頃は触れることのない防災設備の使い方を理解しようと、参加者の方々も熱心に話を聞いていました。ベンチカマドには実際に火をいれ、炊き出し実習も行いました。

防災士による「役立つ防災スキル」をテーマとした講演では、身近なものをどのように災害時に応用することができるかを紹介。知っているようで知らない知識が多数あったと好評でした。また、さまざまな災害食の食べ比べができる「災害食グランプリ」を実施しました。災害食を食べ比べる機会はほとんどないので、参加者の方々も大変盛り上がっていました。

今回初めて体験したり、聞く話も多かったとの声もあり、実施者と来場者がアットホームな雰囲気でも交流することができました。住民同士の絆づくりにも貢献できました。

### 実施者の声

イベントでは高齢化社会を踏まえたコミュニティの再構築と地域の絆を高めることも目的としていました。今回の来場者数は120名となりました。次回以降の開催では、周知方法などを工夫し、より多くの方にご参加頂けるイベントにしていきたいと思います。地域コミュニティの中で常に防災意識を高めておくことは重要です。同様のイベントを継続していくことで、更なる防災意識の醸成に貢献していきたいと思います。

### 参加者の声

「集会所に防災設備があることと、その用途や使用方法を理解することができました」「災害食の比較は個人でする機会がないので大変参考になりました。防災士の講演では、身近なものが防災に役立つことが分かりやすく話されていて参考になりました」





取組  
団体

## 川内コミュニティ未来プロジェクト

代表者 秋元 洋子さん

取組  
名称

## 川内村の幸福感を持てる村づくりを促進する取組み

## 取組の概要

川内村の子供たちが、地域の文化や自然に触れる機会は、震災・原発事故を機に著しく減少。自然豊かな川内村に育ったという実感を持ちづらくなっています。子供たちは、やがては村を離れていきます。そこで、村と結びつきの深い題材をテーマに、独自の文化や習慣を体で感じ、人間的成長を促す取組を実施。子供たちがふるさとに「興味を持ち（興味）」「郷を知り（郷育）」「響き合う（響育）」ための場と機会を設けました。

## ■取組の様子

「川内ふるさと学校」は、村に住む子供たちが村の風土に親しみ、また生活の知恵を授けてくれる村の先輩達と触れ合える機会を大切にしています。3回目である今回は「山に生きる文化と知恵」をテーマに、地域に住む方（村の先生）から薪割りや料理、山遊びなどを学びました。

「いわなの郷で実際に生きたイワナを掴み、養殖している方の想いを聞く」「築150年以上の古民家に暮らす農家宅で餅つきや神棚の飾りつけを通じて、古くから継承されてきた冬の過ごし方を、教えてもらう」「山深い地で生活している山の先生から、生活に必要な薪割りや山の手入れの楽しみ方を学ぶ」子供たちにとっては、どれも初めての体験ばかりです。普段は自然の中で遊ぶ機会があまりない子供が多くいましたが、川内ふるさと学校のなかの普段の学校や家庭とは違う「山の遊び場」に大興奮していました。子供たちの好奇心に溢れた眼差しやたくさんの笑い声で溢れた場となりました。

## ■実施者の声

身近にありながら、触れることがなかった村の自然、習慣、人々に初めて接した子供たちから、生き生きとした元気と好奇心を見ることができました。ただの田舎体験ではなく、生まれ育った村を心と体で強く記憶する場（心に刻む場）を作ることができたと思います。この積み重ねが、やがては地域アイデンティティとなり、地域コミュニティを支える取組みになると確信しています。

## ■参加者の声

「『昔は子供も大人も薪割りをしていた』と聞き、あんなに大きな斧を子供が振り上げて毎日木を割っていたということが今では考えられず、とても驚きました」「これからも楽しい遊びや暮らしのことを知りたいのでまた参加します」



取組  
団体

## ふるさと酒井 そばの会

代表者 根本 伸治さん

取組  
名称

## そば教室による交流促進を計りながら、コミュニティの再生を計る取り組み

## 取組の概要

震災以降、浪江町では広域的に分散避難を余儀なくされ、かつての地域のつながりは失われつつあります。現在でもさまざまな事情で帰還は進んでおらず、帰還された方々の孤立も顕在化しています。このような状況の中で、被災された方々の交流の場としてそば教室を実施しました。「そば」という、親しみやすいテーマであれば参加しやすいと考えました。そば打ちに取り組む過程で会話や交流が生まれ、参加者同士の絆が深まりました。

## ■取組の様子

そば教室には、帰還して自宅に戻られた方、公営住宅に住まいを移された方、町外にご自宅を求められた方、避難先と浪江町の自宅を行き来している方など、さまざまな環境で暮らしている浪江町民の方が参加しました。震災後に新たに建てられた公営住宅の集会所で3つのグループに分けて実施しました。全員がそば打ちを体験できるように講師、スタッフが積極的に声掛けし、会話を楽しみながら、全員参加の料理教室を開催しました。参加者の方々も積極的にそば打ちに参加され楽しい雰囲気となりました。震災以降、町民の気持ちや生活が離れていく中で、改めてそばを作るという共同作業を行うことによって、地域コミュニティでのつながりを再認識し、明日への活力、生きがいにつながることができました。そば打ちを通して、新たなコミュニティの再構築ができました。

## ■実施者の声

会場として利用した幾世橋住宅団地で初めて皆で集まってそばを打つ機会となりました。地域住民同士の交流の機会として意味のあるものとなり、嬉しく思います。65歳以下の若い世代の参加者が少なかったことが今後の課題です。そば教室は、男性にも受け入れられやすく、特に高齢の方にも積極的に参加してもらえたことで、今後も開催したいと感じました。

## ■参加者の声

「そば打ちは年齢に関係なく楽しめることがわかりました。奥も深そうなので、もっと勉強してみたいと思いました」「みんなでわいわい話しながら一緒に作る楽しさと、一緒に共同作業をすることで、皆様とのつながりをより持つことができました。次回もぜひ開催してほしいです」



取組  
団体

## いいたてお母さんコーラス

代表者 渡辺 しづえさん

取組  
名称いいたてお母さんコーラス40周年記念クリスマス  
コンサート

## 取組の概要

震災以降、私たちは8年間避難生活を強いられてきました。しかし、いいたてお母さんコーラスのメンバーは「心に太陽を、唇に歌を」のスローガンを掲げ、避難先であった飯野学習センターをお借りし、練習を続けてきました。その間には、いろいろな合唱団の方々から支援や励ましをいただきました。これまで支えてくださった皆さんへの感謝と40年間歌い続けてこられたことを記念してコンサートを計画、実施しました。

## ■取組の様子

飯館村交流センター（ふれあい館）の大ホールで村民、近隣の合唱団、行政、学校関係、震災前にお世話になった講師（指揮者）、伴奏者を招待しコンサートを開催。長年歌い続けてきた曲やオリジナル曲など、日々練習を重ねてきた曲を披露しました。40年の間、さまざまな方にご支援をいただきました。特に、震災以降は多くの合唱団や応援して下さる皆様からの励ましをいただきました。こうした経験を共にしてきたメンバー全員で元気に帰村できた喜びと感謝を伝えることをコンサートのテーマとしました。

当日は、いいたてお母さんコーラスの他に、南相馬の小学生、中学生、高校生からなるMJC合唱団にもご参加いただき、発表を行いました。さらに、避難時に奈良にご招待くださり一緒に舞台にも立った奈良の合唱団「楽しくコーラス」のメンバーもサプライズで駆けつけ会を盛り上げていただいたことは、驚きとともに大変嬉しいプレゼントとなりました。会場にお越しいただいたみなさんと一緒になって楽しむことのできるコンサートを開催することができました。

## ■実施者の声

お越しいただいたみなさんに、日ごろの練習成果を聴いていただくことで、今までの支援に対するお礼の心を伝えることができました。当日まで、綿密にスケジュールを立て、練習を行い、打ち合わせを重ねてきたので大きな問題もなくコンサートを進行することができました。コンサート実施後には若い世代の入会希望者があり、更に精進を重ねていきたいです。

## ■参加者の声

「オリジナル曲を聴き涙が出ました」「避難先でも歌い続けてきた姿勢を評価したい」「肩ひじ張らないコンサートはとても楽しかった」「これからも続けてほしい」「素晴らしい指揮者のもとで練習できて幸せですね」





## 取組 団体

## 飯樋復興有志の会

代表者 荒 利喜さん

## 取組 名称

## 山中郷ウォークラリー

### 取組の概要

震災と原発事故によって長い避難生活を余儀なくされ、地域コミュニティが失われてしまいました。こうした状況の中で地域復興を図り、地域コミュニティを再生させるための取組を行いました。飯館村の地域住民のほか、域外住民も対象とし、地域の歴史文化や先人の労苦に思いを馳せるために、3時間をかけて地域の名所旧跡を巡り歩くウォークラリーを実施しました。ウォークラリーの後には交流会も開催しました。

### 取組の様子

飯館村に集合し、旧古戦場、塩の道、神社仏閣、旧宿場などの地域の名所旧跡を、飯館村文化財愛好会の方による解説を聞きながら約3時間をかけて巡り歩きました。地域の先人たちの苦労や功績を知ることができ、郷土への想いを深めるきっかけにもなりました。また、参加者が共に地域を歩くことで連帯感を生むこともできました。飯館村ならではのウォークラリーを実施することができました。飯館村の全戸にチラシを配布したことにより、当日は200名の参加がありました。今回は子供たちの参加が比較的少なかったため、今後は子供たちの参加を促す工夫、地域の魅力が伝わる工夫について考えていきたいです。

ウォークラリーの終了後には飯樋町集会所前庭で交流会を開催。地域の「飯曾小唄」を参加者全員で合唱しました。その後、飯館村文化財愛好会の方から「飯樋の思い」を披歴していただき、地域への愛着を深める機会となりました。この他に郷土芸能や舞踊などを楽しみ、参加者の郷土愛と連帯感の醸成を図ることができました。

### 実施者の声

参加者の皆さんと地域を共に歩き、史跡を巡ることで郷土愛と参加者間の連帯感を強くしました。また先人の想いに触れることで士気も高まり、復興への原動力に大きく寄与することができました。子供たちの参加が少なかったため、子供に魅力ある企画も検討します。地域の歴史文化に関心を高めることは、復興に欠かせない大切な取り組みだと考えています。

### 参加者の声

「地域の史跡を巡ることで、故郷への想いを深めることができました」「郷土芸能に出演するために、1か月前から練習をはじめていましたが、震災後にみなさんと飯館で飯曾小唄を踊れる日が来たことをとても嬉しく感じました」



取組  
団体

## 絆菜園の会

代表者 斎藤 敏夫さん

取組  
名称

## 菜園づくりを楽しむ会

## 取組の概要

避難生活が長期化する中で、被災者の体力を維持し、交流活動を活性化することを目的に野菜作りを始めました。被災者を中心とした会員が、なみえ交流館に隣接する荒れ地を耕しました。土に触れることで心のゆとりが生まれ、ストレスが解消されています。避難生活の課題である食生活改善においても自分たちの手で野菜不足を補うことができます。採れた野菜は地域住民の皆さんにも味わっていたいています。

## ■取組の様子

浪江町からの避難者が集まるなみえ交流館には、農業を営んでいた方も多く、避難先でもせめて家庭菜園だけでも作りたいという声があがり、会を発足しました。交流館に隣接する荒れ地をトラクターで開墾し、市内の酪農家から購入した堆肥で土づくりから始めました。いまでは良質な畑地となっています。四季のさまざまな野菜を栽培しており、育種管理、定植、肥培管理、収穫を定期的に集まって行いました。野菜作りは奥が深く、育苗、稚苗の管理、本畑の定植(耕起、施肥)病虫害の予防、対策などについて会員同士意見を交換し合いながら、丹精込めて栽培しました。採れたての野菜は地域住民や訪れた方にも試食をしてもらい、好評をいただきました。また、県で主催している交流フェスタや浪江町内で開催する「十日市」にも、畑で収穫した色々な野菜を展示しました。

野菜を通した地域住民同士のつながりづくりの場となるだけでなく、日々土に触れ、共に汗を流し、交流することで、参加者のストレス軽減にもつながっています。

## ■実施者の声

避難生活が続く中、土に触れ、体を動かし採れたての野菜を試食することが、なによりの喜びの時間です。農作業によって日頃の運動不足は解消されています。また、野菜作りを通して新たなコミュニティも生まれています。何より土と戯れ、野菜作りに向き合っていると故郷に戻ってきたような気持ちになることができ、心の安らぎを感じると共に、参加者の生きがい、やりがいとなっています。

## ■参加者の声

「収穫祭などの交流会に参加した際に試食した、採れたての新鮮野菜の味は格別でした」「精魂込めて育てた旬の味を堪能することができました。十日市等のイベントに参加することで来場者とのコミュニケーションも楽しむことができました」





取組  
団体

## 菊川手編みの会

代表者 小池 時子さん

取組  
名称

## 手編み教室の開催

## 取組の概要

福島から東京に避難して来た方たちの新たなやりがいや、生きがいづくりの場として、月2回、講師を招いて編み物教室を開催しました。ばらばらに暮らしていた福島の仲間たちが再び集まってつながり確かめ合う機会となりました。被災者同士のつながりだけでなく、避難先の近隣の方々との交流の輪を広げる機会にもなりました。

## ■取組の様子

会の代表は震災以前、大熊町で喫茶店を開業していましたが、震災を機に東京に避難してきました。東京で再び喫茶店を開業することは難しくとも、避難して来たもの同士が交流をもち、絆を深めあう機会や、生きがいづくりの場を作りたいという気持ちから、東京都墨田区菊川で月に2回、編み物教室を開催しました。参加者は関東近郊に住む被災者と墨田区の近隣住民の方々です。

編み物の初心者から熟練者までさまざまなレベルの方が参加しましたが、互いに教え合ったり糸を分け合ったりしながら、毎回和気あいあいとした雰囲気で開催することができました。

また、一生懸命手を動かしながら、話をするのも会の楽しみとなっています。参加者同士が多様な価値観に触れることができ、学びも多くありました。また何より、みんなで話をするのが心のリフレッシュにつながり、参加者が自然と絆を深め合うことができました。

## ■実施者の声

手編みの会には都内に避難している参加者以外に、千葉、埼玉、茨城などに避難されている方の参加もありました。この会を重ねるごとに参加者も増え、その中には男性の方もいます。みんなでいろいろな作品について考え、一生懸命手も動かしますが、おしゃべりにも花が咲きます。集まる度に互いに元気を分け合うことができ、実施する側も毎回楽しく開催することができました。

## ■参加者の声

「その場にいるもの同士が、糸も作品も快く分け合って編み物を楽しむことができました。」「編み物を通して心が通じ合いとても楽しい時間を持つことができました」「会に参加する度に時を忘れて話しをし、多くの学びを得ることができました」





取組  
団体

## 請戸写真展実行委員会

代表者 鈴木 市夫さん

取組  
名称

有志の方々が撮影し保管していた浪江町の震災前の伝統行事の写真を集め、写真展を開催。交流を図りながら、地域の伝統を継承する取組。

## 取組の概要

浪江町請戸地区は津波の被害が大きく、家屋が流され、家庭にあった写真もほとんどが失われました。古くから続く地域の存続の危機の中、請戸の記録を保存しなおし、文化を継承する方法はないかと考えました。そこで、町の歴史を後世に残すべく、震災前の請戸の貴重な写真を一枚ずつ集めて展示する、請戸写真展の開催を計画しました。取組によって、震災で失われかけていた地域住民の交流を活性化することもできました。

## ■取組の様子

浪江町の伝統的なお祭りである「十日市祭り」で写真展を開催しました。準備段階として、写真展をどのように実施していくかを参加者と一緒に話し合いました。請戸の地域住民は、震災以降福島県内外に避難し、いまでもばらばらに居住しています。そのため、ワークショップ及び交流会を浪江町、いわき市、二本松市で実施。集まりやすい地域で参加してもらいました。取組では、請戸地域で古くから続く「安波祭り」の震災前の写真をテーマとし、既に失ったと思われていたさまざまな写真を集めました。また集まった写真を、整理し展示する写真を一枚ずつ選定していきました。

この取組が、ばらばらに暮らす請戸の地域住民同士の大きな交流の機会となりました。また、ワークショップや写真展当日は、震災後の避難生活以降、数年ぶりに再会を果たす地域住民の姿も多くみられました。取組を通じて、震災前の請戸の生活を懐かしみ、交流を楽しむ機会を設けることができました。また結果として請戸地区の歴史を写真記録として残すことにもつながりました。

## ■実施者の声

参加者を募る告知が難しく、一番の課題となりました。ワークショップも参加者数にバラつきがあり、人集めには終始苦労しました。一方で、写真展という試みへは関心が高く、とても楽しんでもらうことができました。今後は、復興整備が進み、震災前の面影が無くなっていく請戸の記録をどのように残し、地域住民同士のつながりをどのように維持していくか考えていきたいです。

## ■参加者の声

「まさか、震災前の写真が残っていると思ってなかったんで、写真を見てとても驚きました」「自分が小さかった子供の頃の写真が残っていて嬉しかったです」「震災当時、同じ避難先だった方と写真展を機に数年ぶりに会えてとても嬉しかったです」



取組  
団体

## チクチクひろば

代表者 阿部 真弓さん

取組  
名称

## 編物・パッチワーク・フラワーアレンジメント教室

## 取組の概要

被災者があつまりやすい、いわき市の会議室と常陸太田市の公民館において、福島県出身の講師による編み物、パッチワーク、フラワーアレンジメントの教室を開催しました。取組を通して、被災者同士が手を携え、福島や仲間たちとのつながりを創出することの重要性を感じました。また、被災者同士の交流のみならず、地域の方々との関係性も深まり新たなコミュニティが誕生しています。

## 取組の様子

教室には、大熊町・双葉町・浪江町から、いわき市や関東圏に避難している方々が参加されました。編み物教室では講師として浪江町で震災前から「世界の子供たちへ編み物作品を送ろう」プロジェクトに携わっている方をお招きし、ストール編みなどを教わりました。パッチワーク教室では講師として浪江小学校で長年子供たちにパッチワークを教えていた方をお招きし、テーブルセンターなどを制作しました。また、フラワーアレンジメント教室ではバスケットの花盛りを制作しました。参加者の皆さんからは、講師の指導を受けたことでアレンジのコツを学ぶことができた、大変ご好評をいただくことができました。講師の中には震災時に廃業を経験した方もいましたが、取組を通じて、避難先に新たなコミュニティをつくることで生きがいを見出しています。また、被災者同士だけでなく、いわき市や茨城県の皆さんにもご参加頂き、さらなる活気が生まれています。震災前には知りえなかった被災者同士が知り合う機会にもなっており、絆を深め、福島への想いが再構築されました。

## 実施者の声

これまで小規模に個々が継続してきた交流活動が、1つの会場に集まり、幅広く交流を育む活動ができるようになりました。参加者の皆さんが一堂に会し、賑わいが生まれています。さらに、会場周辺のいわき市泉町の方々にも参加していただくことができ、被災者にとどまらない交流の輪が大きく広がりました。今後も皆さんに楽しんでいただきながら会を継続していきたいです。

## 参加者の声

「編み物の経験しかありませんでしたが、レース編みやパッチワークなどの教室に参加することで、新しい挑戦でき大変有意義でした」「さまざまなことを教えていただいて、趣味の幅が広がりました」「いわき市の方との新たな交流ができました」

